第１章　序論 -本論文の目的と意義-

1.1　本論文の目的と意義

本論文は状態述語文の他動化と使役化を構文的側面と意味的側面から考察することを目的とする。

状態述語文の他動化と使役化とは、状態述語文によって表される状態を別の関与者が引き起こすことをどのように表すかということである。われわれが認識する世界の状況を状態、非状態に分けるなら、これまでの他動化と使役化に関する研究は非状態を中心に行われており、状態を対象とした研究はほとんど行われてこなかった。それは、寺村(1982)でも指摘されているように、使役化の対象になるのは動的事象であり、状態を使役化するということは不可能であると考えられてきたからである。しかし、「ある状態を引き起こす」ということは現実世界には存在することであり、したがって状態も他動化・使役化の対象になるはずである。そこで、本論文ではこれまでは不可能であるとされてきた状態述語文の他動化と使役化の問題に着目し、状態述語文の他動化と使役化の過程について私案を提案する。つまり、状態を他動化・使役化する過程には、その中間段階として変化という過程が存在するという新たな観点に立ち、状態述語文の他動化と使役化を考察する。それを受けて、状態述語文の他動化形式・使役化形式として、「～く(に)する」「～く(に)させる」、「～ようにする」「～ようにさせる」、「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」の 3 つの形式を提示する。これらの形式は、先行研究では断片的にしか言及されてこなかったものであるが、本論文では、これらの形式を状態述語文の他動化形式・使役化形式という新たな観点から捉え直して、体系的に考察し、その構文的特徴と意味的特徴を記述する。

状態述語文の他動化と使役化に関する考察は、これまで非状態を中心に行われてきた他動化・使役化の研究に加えて、他動化・使役化の全体像を見渡せる重要な手がかりとなる可能性を持っている。

1.2 研究対象と研究方法

本論文の研究対象は、状態述語文の他動化形式・使役化形式「～く(に)する」「～く(に)させる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」構文の3つの形式である。研究方法としては、これら3つの形式を構文的側面と意味的側面から考察し、状態述語文の他動化と使役化の構文的特徴と意味的特徴を記述する。さらに、状態述語文の他動化と使役化の成立に関する一般化を導き出す。

状態述語文の他動化と使役化における状態述語文とは、単純現在形で現在の状態を表す文であり、具体的には述語が以下に示すa、b、cで構成される文を指す。

(1) a. 形容詞・形容動詞、「名詞＋だ」

b. 動詞＋ない、動詞＋やすい/にくい、動詞＋たい

c. 状態動詞(可能動詞)

(1a)は一般に形容詞述語文や名詞述語文と呼ばれるもので、典型的な状態述語文である。(1b)は動詞に否定の「ない」が後続した否定文、形容詞「やすい/にくい」が後続した難易文、願望の「たい」が後続した願望文である。これらは(1a)のように一般に状態述語文と呼ばれる部類には入らないが、本論文ではこれらが意味的に状態性を持つことや形態的にも「ない」「やすい/にくい」「たい」などが形容詞に属することから、状態述語文の一種と見なすことにする。(1c)は(1a)、(1b)とは異なり形態的には動詞に属するが、意味的に状態性を持つので、状態述語文の一種と見なして考察の対象に入れる。

(1)の状態述語文と先にあげた他動化形式・使役化形式との対応関係を示してみると次のようになる。

状態述語文	他動化形式・使役化の形式
a. 形容詞・形容動詞・「名詞＋だ」	「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」 例)高める・高まらせる 「～く(に)する」「～く(に)させる」 例)高くする・高くさせる
b. 動詞＋ない	「～くする」「～くさせる」

動詞＋やすい/にくい、 動詞＋たい	例)??行かなくする・??行かなくさせる 見えなくする・見えなくさせる 食べやすくする・食べやすくさせる 食べたくする・食べたくさせる 「～ようにする」「～ようにさせる」 例)行かないようにする 行かないようにさせる 見えないようにする 見えないようにさせる 食べやすいようにする 食べやすいようにさせる
c. 状態動詞	「～ようにする」「～ようにさせる」 例)できるようにする できるようにさせる

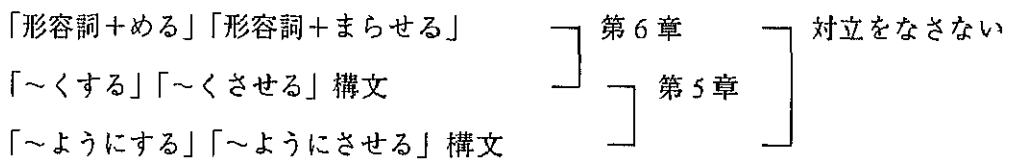
＜表 1：状態述語文と他動化形式・使役化形式との対応関係＞

上記の＜表 1 ＞は状態述語文と他動化形式・使役化形式を対応させたものである。以下、第 3 章から第 6 章にわたり、＜表 1 ＞に示した対応関係を中心に状態述語文の他動化と使役化を構文的側面と意味的側面から考察する。構文的側面としては、状態と他動化・使役化を結びつけるための中間段階として変化を表す自動詞文を設定し、自他と使役の関係から他動化と使役化を捉える。意味的側面としては、各形式の意味的特徴は何か、そして各形式は互いにどのように対立しているかを明らかにする。さらに、各形式が持つ制約を究明し、他動化・使役化の成立要因や他動化・使役化の選択原理について考察する。

＜表 1 － a ＞の述語が形容詞・形容動詞、「名詞＋だ」で構成される状態述語文の他動化・使役化には、「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」と「～く(に)する」「～く(に)させる」構文の 2 つの形式が用いられる。前者は形容詞から派生した動詞の数が 20 ほどに限られるため、生産的な方法とはいえず、主に用いられるのは「～く(に)する」「～く(に)させる」構文である。そこで、第 3 章では「～く(に)する」「～く(に)させる」構文を通して状態述語文 a の他動化・使役化を考察し、「～く(に)する」「～く(に)させる」構文の意味や「する」が選択されるか「させる」が選択されるかという他動化と使役化の選択原

理を追究する。また、第 6 章では「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」の構文的特徴と意味的特徴を考察し、「～く(に)する」「～く(に)させる」構文との対立を論じる。

＜表１－ｂ＞の述語が「動詞＋ない」で構成される状態述語文の他動化・使役化には、「～くする」「～くさせる」構文と「～ようにする」「～ようにさせる」構文が用いられる。ただし、「～くする」「～くさせる」構文はすべての「動詞＋ない」に適用されるわけではなく、その成立には制約がある。また、「動詞＋やすい/にくい」「動詞＋たい」においても「～くする」「～くさせる」構文の成立には制約がある。この制約に関しては第4章で考察する。そして、第5章では、述語が＜表１－ｂ＞と＜表１－ｃ＞で構成される状態述語文の他動化・使役化に用いられる「～ようにする」「～ようにさせる」構文についてその構文的特徴と意味的特徴を考察する。なお、「～くする」「～くさせる」構文と「～ようにする」「～ようにさせる」構文の対立を明らかにする。なお、「～ようにする」「～ようにさせる」構文は補文に形容詞述語文をとらないので、「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」と対立しない。次に各形式の対立関係を図示する。



1.3　本論文の構成

本論文は全７章からなる。概略すると、以下のようである。

第１章 序論では、本論文の目的と意義、研究対象と研究方法、本論文の構成を述べる。

第２章 他動性と使役性では、状態述語文の他動化と使役化の考察に入る前に、他動性と使役性とはどのように定義されるのか、そして他動性と使役性の類似点と相違点はどこにあるのかという問題に関して先行研究を踏まえて議論する。

第３章　状態述語文の他動化と使役化１-1―「～くする」「～くさせる」では、状態述語文の他動化形式・使役化形式の一つである「～くする」「～くさせる」構文を通じて、状態述語文の他動化と使役化を考察し、その構文的特徴と意味的特徴を明らかにする。考察の対象になる状態述語文は、述語が形容詞、形容動詞、「名詞＋だ」で構成される文である。構文的特徴としては、状態を直接、他動化・使役化することはできないこと、すな

わち、変化という過程が状態と他動化・使役化の間に存在することを主張する。そして、変化の過程は言語的には「なる」と結びつくことを論じ、「なる」と「する」の自他関係、「する」と「させる」の使役関係に加え、「なる」と「させる」の使役関係という新たな対応関係を提示する。意味的特徴としては、他動化と使役化の選択原理について他動性と使役性の違いに基づいて説明する。

第4章　状態述語文の他動化と使役化Ⅰ-2―「～くする」「～くさせる」では、述語が「動詞＋ない」「可能動詞＋ない」「動詞＋やすい/にくい」「動詞＋たい」で構成される状態述語文の他動化と使役化を、「～くする」「～くさせる」構文を用いて考察する。構文的特徴としては、第3章で明らかにした「なる」と「する」、「なる」と「させる」の自他と使役の関係がここでも適用されることを述べる。意味的特徴としては、「動詞＋ない」の他動化と使役化に関して、他動化と使役化が成立するための意味的条件と統語的条件を提示する。さらに、「可能動詞＋ない」「動詞＋やすい/にくい」「動詞＋たい」などの他動化と使役化においても、「動詞＋ない」の場合と同様の意味的条件と統語的条件がかかわっていることを明らかにする。また、他動化と使役化の選択原理について他動性と使役性の違いに基づいて説明する。

第5章　状態述語文の他動化と使役化Ⅱ―「～ようにする」「～ようにさせる」では、状態述語文の他動化形式・使役化形式の一つである「～ようにする」「～ようにさせる」構文を取り上げ、その構文的特徴と意味的特徴を明らかにする。「～ようにする」「～ようにさせる」構文は、様々な類型の文を補文に取るが、もちろん状態述語文もその対象になる。そこで、状態述語文の他動化と使役化という観点から、「～ようにする」「～ようにさせる」構文を考察する。構文的特徴としては、「ようにする」「ようにさせる」は「ように」と「する」「させる」が結合し、他動化形式・使役化形式となること、さらに、「ように」が補文化辞としての役割を担い、補文が他動化と使役化の結果を表すことを述べる。そして、第3章や第4章で述べた「なる」と「する」、「なる」と「させる」の自他と使役の関係がここでも観察されることを指摘する。意味的特徴としては、「動詞＋((さ)せ)」構文、「～くする」「～くさせる」構文との比較や時間副詞句の解釈の問題などを通して、「～ようにする」「～ようにさせる」構文には未実現の状態変化を表すという意味的特徴があることを述べる。そして、この意味的特徴で「～くする」「～くさせる」構文との対立を説明する。また、他動化と使役化の選択原理について他動性と使役性の違いに基づいて説明する。

第6章　状態述語文の他動化と使役化Ⅲ－形容詞派生動詞では、形容詞から派生した「形容詞＋まる」「形容詞＋める」の自他と使役の関係を考察する。この自他と使役の関係は、本論文で提示している状態述語文の他動化と使役化における自他と使役の関係と平行していることを論じ、状態述語文の他動化と使役化の派生関係が語彙レベルにおいて検証されることを述べる。さらに、「形容詞＋める」構文と「形容詞＋くする」構文の意味的特徴を明らかにし、両形式の対立を説明する。また、他動化と使役化の選択原理について他動性と使役性の違いに基づいて説明する。

第7章　結論では、本論文で考察した3つの状態述語文の他動化形式・使役化の形式、すなわち、「～くする」「～くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞＋める」「形容詞＋まらせる」構文の構文的特徴と意味的特徴についてまとめを行う。また、状態述語文の他動化・使役化と動詞述語文(非状態を表す)の他動化・使役化を統合して他動化と使役化の全体像を描いてみる。そして、最後に今後の課題と展望を述べる。